

シノドスの教会をよりよく理解するために（その二）

小西広志

2021 年 11 月 13 日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。「シノドスの教会をよりよく理解するために」と題して動画を配信しています。今日はその二回目です。教会のイメージについて、特に神の民についてお話ししましょう。

前回の復習

最初に前回の復習をいたします。前回は、教会はどこから始まるのかについてお話ししました。それは天の御父の救いの想い、救いのデザインから始まるのです。そして、御子キリストを通じてこの世に設立され、聖霊の導きの中で教会はこの世にあり続けるのです。ですから、教会は三位一体の神から始まり、三位一体の神をこの世に示すためにあるのです。父と子と聖霊の三位にして一体の神は、その神のいのちの中に豊かな愛の交わりがあります。教会もまた、三位一体の神をこの世に示すのですから、豊かな交わりがそこにはあるのです。

教会は神秘

教会の改革

さて、もう少し教会の本質についてお話ししましょう。そのためには 60 年ほど前に開催された第二バチカン公会議に立ち戻る必要があるでしょう。第二バチカン公会議は教会のあり方をガラリと変える大きな出来事でした。確かに、公会議の前の教会と公会議の後の教会では大きく変わりました。菊地大司教様とかわたしぐらいあたりが昔のラテン語のミサを体験している最後の世代と言ってよいかもしれません。確かに教会は目に見えて変わりました。しかし、教会の本質は変わらないのです。大切なところは変わらないのです。公会議は忘れていた、あるいは歴史の中で埋もれていた教会の美しさ、教会の本質を再発見するためにあったのです。そして、いつも新しい視点で教会の本質を理解し、解釈することが求められているのです。

教会憲章

第二バチカン公会議が提示した大切な文書の中に『教会憲章』というものがあります。これは日本だけの呼び名で正確には『教会に関する教義憲章』と呼びます。その序文に次のような表現があります。

教会はキリストにおけるいわば秘跡、すなわち神との親密な交わりと全人類一致のしるし、道具であり……。

教会は秘跡、交わりと一致のしるし、道具

「教会は秘跡である」という表現は、その頃、大きな驚きと疑問を呼びました。いえ、今でも「教会は秘跡である」は、教会のあり方を考える上での大切な定義となります。ここでは時間がありませんから詳しい説明は避けます。ただ、「教会は秘跡である」という表現を心に留めて、心に刻んでください。『教会憲章』が發布されて56年が過ぎました。この単純ですが奥の深い定義をめぐる探求が学問の領域でも、信仰を生きる領域でもなされています。

神秘

わたしは、「教会は秘跡である」の「秘跡」を「神秘」と置き換えて理解するのが好きです。「教会は神秘」なのです。神さまは神秘です。イエスさまも神秘です。聖霊の働きも神秘です。人間の理解では到達し得ない深いもの、尊いものが神秘です。人生も神秘です。いのちも神秘です。生活も神秘です。信仰も神秘です。人は神秘に囲まれて、神秘に触れて、神秘から力をいただいて生きているのです。

教会も同じです。教会は理解し尽くせないものです。もちろん、この地上の組織ですから人間的な側面があります。でも、教会の本質は神秘なのです。しかも、訳の分からない神秘ではなく、何か人を魅了してやまない神秘なのです。だからこそ、多くの人々がその神秘にあやかりたくて、その神秘に触れたくて教会の扉をたたくのです。

教会のイメージ

教会は神秘ですから、「教会とはこれこれこうである」、「教会とはかくかくしかじかであ」と定義するのは難しいです。そこで、教会はイメージを用いて語られてきました。つまり、「教会は〇〇のようなものだ」、「教会とは〇〇と比べられる」といった具合です。キリスト信者が豊かな豊かな教会のイメージを抱けば抱くほど、その人の中に現れる教会の姿は輝きを増します。逆に一つの固定したイメージだけに固執してしまうと、教会の姿はとてもきゅうくつなものとなります。例えば、教会に行けばお菓子がもらえるというイメージを抱いていたとしたら、実際にお菓子がもらえないときには教会が嫌いになってしまうでしょう。しかし、教会はお菓子をもらえるところだし、そのためにはみんなでお菓子を持ち寄って分かち合えばよいのだというイメージを持っていたら、お菓子をもらう側からお菓子を与える側へとその人は変わっていくのです。

教会についての豊かなイメージを持つことはとても大切です。しかも、そのイメージが聖書に基づいていることは必要です。

キリストのからだ

それで、『教会憲章』が特に注目した二つのイメージがあります。「キリストのからだ」と「神の民」です。「キリストのからだ」について長々と説明するのは今ここではしません。ただ、少しわたしの体験を分かち合って、教会が「キリストのからだ」なのだと感じていただけたらうれしいです。

数年前から、聖体拝領の際にご聖体を配るときに「キリストのおんからだ」と言うようになりました。それまでは「キリストのからだ」と言って、ご聖体が表示されて「アーメン」と答えていたわけです。どうして、「キ

リストのおんからだ」言うようになったのかはよく分からないのです。しかし、わたしなりの理解ですが、この変化は「いいな」と思うわけです。「キリストのからだ」である教会が、教会の役務者、ここでは司祭や助祭、あるいは信徒の奉仕者と通じて、大切な神秘、神秘の中の神秘である「キリストのおんからだ」を配るわけです。神秘である教会から、さらに神秘の中心であるご聖体のイエスさまをいただいて、イエスさまと同じように生きていく。こうして神の神秘を生きていく。そのようなことを意識させられます。この「キリストのおんからだ」には。

神の民

さて、もう一つの教会を表すイメージは「神の民」です。「わたしたちは神の民、その牧場の群れ」と典礼聖歌で歌う、あの「神の民」です。これも長々とした説明はここではしません。しかし、イメージとして「神の民」というイメージを大切にしたいものです。ここでは『教会憲章』9番に記されている「神の民」の特徴を六つ挙げます。

1. 神の民のかしらはキリストです。
2. 神の民の身分は自由と品位を備えた神の子です。
3. 神の民に与えられた掟は「キリストが愛したように、愛しなさい」という掟です。
4. 神の民の目的は神の国の発展です。
5. 神の民は小さな群れです。
6. 神の民は旅する民です。

まとめ

最初に申し上げましたように、第二バチカン公会議で教会が改めて再発見した教会の美しさ、素晴らしさは「教会が神秘である」という真実と「教会はキリストのからだであり、神の民である」というイメージです。とりわけ、「神の民」である教会は、公会議後の教会の発展に大きく貢献しました。「わたしたちは神の民」という一節を大切にしていきたいです。民だからこそ、互いに聞き合い、互いに分かち合い、互いに協力し合うことができるのです。民だからこそ、まだ神さまを知らない人々を受け入れることが可能となるのです。民だからこそ、「共に歩む」ことができるのです。これこそがシノドスの教会の姿です。

次回は神の民の中の務めと尊厳について少しお話しいたしましょう。それではまた。